# 水島空襲体験記

片　岡　治　恵　さん

倉敷市連島町鶴新田は,私の生まれ育った故郷です。江戸末期の文化(※1)文政から弘化開を最後に干拓され，３６０町(※2)歩余りの土地に，３代前の親子が各方面から移住して４００戸ほどの戸数があり，殆(ほとん)どが「レンコン」「米麦」「野菜」を主体とした農家でした。東は亀の形をした亀島山が見え,南西には瀬戸内海と高梁(はし)川河口を土手でさえぎり,夏は海水浴や潮干狩り，北東の大平山には箆取(へらとり)神社があり，春は桜見物も楽しめ，農家としては地の利や資源に恵まれた静かな田園地帯でした。

昭和１５年４月，私は弘化(※3)尋常小学校へ入学しました。その時は，教科書も兄達が使った本と同じでしたが，２年生になると連島南国民学校と学校の名前も変り，教科書も新しくなりました。その年の１２月８日，大東亜戦争の勃発です。３年生頃になると,運動靴や半紙が買えなくなり,習字も新聞紙に書くので本気で字の練習もできませんでした。４年生頃には，運動靴の代わりに「ワラジ(※4)」を母がせめて女の子らしくと，赤と白の布を緒に付けて作ってもらいました。朝履いて下駄箱に入れておくと帰る時には盗られて，履いて帰ることはできませんでした。またこの頃から学芸会も運動会もなくなり，農繁期の田植えや稲刈りなど，出征(※5)兵士の家へ手伝いに行かされました。５年生になると，朝新聞配りを強制的にさせられ，もちろん勤労(※6)奉仕，ゴルフ場あとや土手の下等を開墾して，さつま芋や小麦等を植え収穫しました。その収穫した作物を生徒が食べたり，頂いたりしたことはありません。

昭和２０年４月，６年生になると，毎日鍬(くわ)や鎌を持って学校に行きました。教科書らしい本もなく，毎日ほとんど田や畑に出ていました。この頃から空襲警報も度々あり，ゴルフ場から小麦をかついで帰っていると，「艦載機(※7)」と言う飛行機が屋根の辺りまで下りてきて機関銃で人を撃つので，私たちは慌てて菜の花畑にかくれました。そして岡山の空襲，高松の空襲，福山の空襲もあり，遠く離れていても空を真赤にこがし，まる

で花火を見るようでした。

昭和２０年６月２２日，水島(※8)の航空機製作所が空襲にあった時の事です。空襲警報が鳴るので慌てて家の前の防空壕(※9)に入りました。母と弟２人と私の４人です。間もなく真上で「パンパン」と爆弾の破裂する音で，今に防空壕(ごう)の上に落ちるのかと気が気ではありませんでした。母は黒住教のお経をあげて祈り，弟たちも声一つあげず生きた気がしなかったと言うのはこの様な状況でしょうか。

【空襲後の航空機のエンジン部分】

１時間も続いたと思われる頃，爆発音も止んだので，恐る恐る防空壕(ごう)から出てみると亀島山の向こうでまっ黒な黒煙が続いていました。「アッ水島の航空機製作所に爆弾が投下されたのだ」，民家には異常がないと，やっと安心しました。大平山と狐島の山に高射砲(※10)が設置されていて，その高射砲の破裂する音が防空壕の上でしたのだと分かりました。消防団の団長をしていた父が半鐘台(※11)の上で見ていて，高射砲が２機撃墜して黒煙をあげながら落ちていったと話していました。その後，潮干狩りに行くと爆弾の破片や機関銃の弾と思われるものがたくさんありました。

その頃は学校で弁当を食べる人は少なく，ほとんどの人が家に食べに帰りました。ご飯ではなく代用食(※12)の「すいとん(※13)」や「おうどん」等の食事が主体だったからです。また，「産めよ増やせよ」の時代で，５人兄弟だった私の家族も戦争中に弟２人，妹１人と３人増え，着る物も配給で自由に買えず，裸で生まれてくる弟や妹達や私達のために親の衣類を仕立て直して着せる大変な時代でした。農家で忙しいので，私は小学校の間，いつも子守りをして一人遊びができるのはお盆，お正月やお祭りの時だけでした。でも大きな農家だったので，まずい物でもおなかいっぱい食べて，ひもじい思いはしたことはありません。お腹を空かせていた子は大勢いたと思います。８月になると広島，長崎に原子爆弾が投下され，多くの人が死にました。そして８月１５日，天皇陛下の玉音(※14)放送

で敗戦を知りました。夏休みの宿題だった軍のためにやる干し草を持って行くと，いらないと言われて，「あーこれでやっと戦争が終わったんだ」とホッとしました。２学期からは新聞配りも中止。勉強に専念できて，私にとって楽しい学校になりました。でも，今まで上級生が行っていた修学旅行もなく，運動会や学芸会もありません。記念の卒業写真だけが連島南国民学校に通学した証です。卒業したら西ノ浦(※15)の国民学校の高等科に入学する人が殆どですが，一部の希望者は受験して県立や私立の中学校や女学校に入学します。そのための補習が３学期になるとありました。私は玉島(※16)女学校に行きたかったのですが，兄弟が多いので諦めていました。すると，３月に先生が，女学校を受験するよう両親を説得に来てくれました。父は反対したのですが，私が「受験だけでもさせて。合格しても行かないから。」と言って受験したら合格しました。父も許してくれて県立玉島女学校の生徒になることができました。でも，それ以降も大変な戦後が続くのです。

---

※1 文化‣文政‣弘化…江戸時代の元号。文化（1804～1818 年），文政（1818～1831 年），天保（1831～1845 年），弘化（1845～1848 年）。連島町鶴新田地区には，開発された時期により文化開，文政開，天保開，弘化開などの小字名が残っている。

※2 町歩…面積の単位。１町歩　9917.36 平方メートル。３６０町歩　3.57 平方キロメートル。

※3 弘化尋常小学校，連島国民学校…現在の倉敷市立連島南小学校。

※4 ワラジ…稲わらで作られたはきもの。

※5 出征…軍隊に加わって戦地に行くこと。

※6 勤労奉仕…戦時中に学生などに課された無償の労働。

※7 艦載機…軍艦に搭載された航空機。

※8 水島の航空機製作所…三菱重工業水島航空機製作所。

※9 防空壕…空からの敵の攻撃に備えて地中に作った穴。

※10 高射砲…敵の戦闘機を撃墜するために地上に設置された火砲。

※11 半鐘台…火災などの報知のために設けられた見張り台。

※12 代用食…主食，特に米の代わりにする食品。芋類・麺類など。

※13 スイトン…小麦粉を水でこね，適当な大きさにちぎって，汁に入れて煮込んだもの。

※14 玉音放送…1945 年 8 月 15 日正午、昭和天皇みずからの声で、ラジオを通じで全国民に戦争終結の詔書を放送したもの。

※15 西ノ浦の国民学校…現在の倉敷市立連島西浦小学校。1947 年の学制改革により，現在の小学校 6 年，中学校 3 年の制度になる前は，国民学校初等科 6 年，国民学校高等科 2 年の制度であった。

※16 玉島女学校…県立玉島女学校。現在の岡山県立玉島高等学校。

# 水島空襲

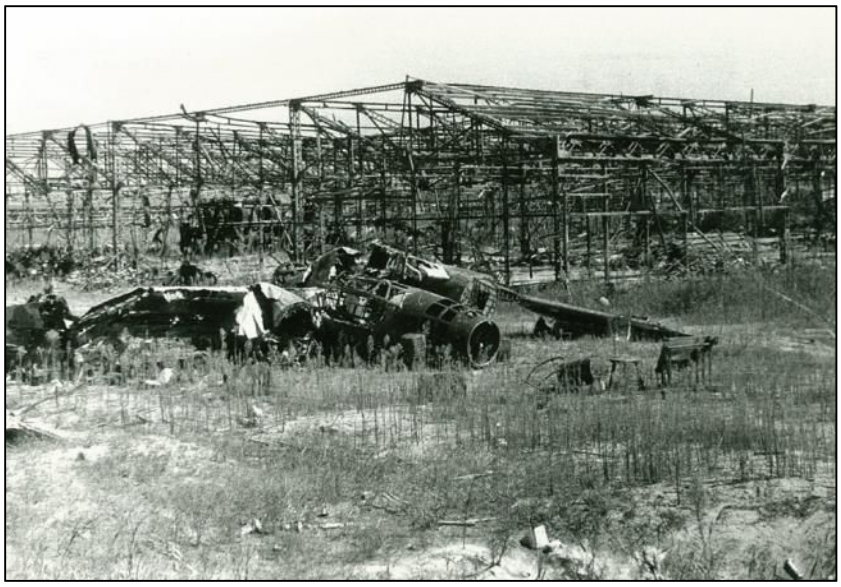
千　田　　晃　さん

私は昭和２０年６月２２日の水島空襲の日に，三菱(びし)重工業の敷地内にいて身をもって爆撃を受け，その時の実感が薄れて行く記憶を一生懸命思い出しながら，戦争を知らない後世の人に伝える使命があるのではないかと思い，記すこととしました。

前は呼松に有った第三(※1)福田尋常高等小学校６年生を終了し，松竹梅の福田青年(※2)学校の内に併設されていた水島建築工養成所に入所し，他市町村から集まった同窓生と，学業及び軍事(※3)教練にと教育を受けていました。本来の実習は中々であったが，軍の仕事が大部分で，色々な所に行って，技術だけは身に付けていました。そうしている時，２回目の空襲ではなかったかと思うが，水島の社宅の中で仕事をしていて逃げる時に，鋸(のこぎり)を持っている同僚にぶつかり，胸に１０センチくらいの傷が出来ました。今はもう見えないくらいになっています。

そんな日々を過ごしていた時，水島の工場敷地内での仕事が生まれ，先生，同僚共々，軍の仕事をし，昼食の時などには，近くにあった故障した攻撃機の機内で食事をしたものです。操縦席の前面は計器でいっぱい，胴体の内部は水色で配線も複雑，機銃が３ヶ所にあった様な記憶があります。仕事場は三菱(びし)の工場群と滑走路の間だったので，当日の朝そこに行った矢先，あの大空襲に遭遇しました。警戒(※4)警報のサイレンが鳴り響き，ウロウロしているうちに空襲警報となり，Ｂ２９(※5)の爆音が東方から聞こえて来ました。広江の上空を見るとＢ２９の編隊が見えたので慌てて近くにあった防空壕(ごう)に急いで入り，Ｂ２９の近づいてくるのを見ていると，機体の下に点々と黒いものが落ちて来ています。「あっ，爆弾だ。」と思い防空壕(ごう)に伏せて目・耳・鼻を押さえていると，やがて「ヒューヒュー」，「ウゴー」と音が大きくなったかと思った瞬間，「ドンドン，ドンドン」と，その音と響きは凄まじいものでした。もうこれで死んでしまうのかと，脳裏を一瞬かすめました。そうこうしているうちに次の編隊が来ています。早く逃げなくて

はと思いながら，トロッコ桟橋のある方へと防空壕を移動して行きました。２～３回目の爆撃の合間を見ては，ようやくトロッコ桟橋にたどり着きました。真ん中を過ぎた頃，次の編隊が来ていたので，慌てて土手まで渡りきると同時に，押してきた自転車を横倒しにして土手を転がり落ちて身を伏せました。あの恐ろしい轟音を聞いた後，もうこれで大丈夫だと思って土手の上に這い上がり，そこで見たものは，先ほどわたって来たトロッコ桟橋の姿はものの見事に無くなっているばかりか，三菱重工の工場群は壊滅状態でした。私たちは，九死に一生を得たと思いつつ，同僚何人であったかは思い出せませんが，兎に角王島山まで逃げることが精一杯でした。その後は山の麓で腰を下ろして，次から次へと来るＢ２９の爆撃の様子をただただ見つめるばかりでした。中畝に有った高射砲陣地から対空射撃はしているものの，Ｂ２９は編隊も崩さず悠々と西方に去って行きました。その時の機数は百数十機だったと思っています。爆撃も終わり，早く家に帰らなければと，同僚共々それぞれの我が家へと向いました。私の家は広江だったので帰る途中東塚まで来ると，道路とその周辺に大きな爆弾の穴が開いていました。穴は５～６ヶ所，直径１０～１５m，深さ２～３m位だったと記憶していますが，もっと多かったかもしれません。その近辺に，手か足かは不明ですがちぎれている人に，ムシロ(※6)を掛けていた現場が今でも脳裏に浮かんできます。兎に角悲惨な姿でした。また農家が何軒も壊れている中で，道路の南側の角地にあった家は，屋根瓦は吹き飛ばされ壁は撃ち抜かれている状態で，本当に気の毒でした。色々なことを体験し，身も心も高ぶるまま，我が家へ自転車に乗って無事帰宅した時の事，もう死んだものだと思っていた矢先のこ



【一式陸上攻撃機の残骸】

とであったから，父母はもちろん家族全員で泣いて喜んでくれました。それも，長男の実は陸軍兵として福井県の部隊へ，次男の剛一は鹿児島の鹿屋海軍航空隊の乙種(※7)飛行予科練習生に，三男の真治は松山海軍航空隊甲種飛行予科練習生として入隊していて，男兄弟４人のうち３人が軍人になっており，身の保障も無い時，死んだと思っていた私が無事帰宅したものだったからだと，今ではそう思っています。そして幾日か過ぎた日，記憶は定かではないが多分８月頃であったと思っています。広島と長崎へ新型爆弾が投下され，その名もピカドンと呼ばれていました。その理由は，空中で１個の爆弾が炸裂した時に，ピカッと光りドンと大きな音がした瞬間，市の大部分が高熱と爆風のため壊滅状態になったとのことであります。これが原子爆弾でした。

　その日から幾日か過ぎ，倉敷の浅原の山中で海軍施設部の仕事をしていた時に，今日は重大なラジオ放送があるとの事だったので，ちょうど時間が来たから全員仕事を中止し，ラジオの前に集合しました。はっきりとは聞き取れない声の御言葉ではあったが，それが日本の無(※8)条件降伏の敗戦の日であり，現在の終戦記念日であります。

---

※1 第三福田尋常高等小学校…現在の倉敷市立第三福田小学校

※2 青年学校…尋常小学校（のちに国民学校初等科）6 年を卒業した後，中等教育学校に進学せずに勤労に従事する青少年に対して社会教育を行っていた。

※3 軍事教練…1925 年以降，中学校以上の生徒・学生を対象に行われた現役陸軍将校による軍事に関する訓練。1945 年に廃止。

※4 警戒警報…警戒を必要とする知らせ。特に，戦時下で，敵 機の空襲のおそれがある場合などに出される。

※5 Ｂ２９…アメリカ合衆国のボーイングが設計・製造した大型爆撃機。

※6 ムシロ…ワラや竹などで編んだ敷物。

※7 乙種飛行予科訓練生…大日本帝国海軍における航空兵養成制度の一つ。旧制中学４年１学期修了者（甲種）と高等小学校卒業者（乙種）による志願制だった。

※8 無条件降伏…軍隊または艦隊が兵員・武器一切を挙げて条件を付することなく敵の 権力にゆだねること。

# 私のトラウマ　“防空壕(ごう)から見た空爆”

大　條　一　郎　さん

毎年，今頃になると思い出す。それは昭和２０年の夏，６月２２日の朝のことであった。

その日も朝からセミの鳴き声がうるさく，うだるように暑い日であった。不思議と青く晴れ渡った空に突然，「ブォーン，ブォーン」というエンジン音がかすかに聞こえて来ると同時に空襲警報が鳴り出した。その日，農作業の動員を休んで家にいた私は，またか？と思いながら防空頭巾(※1)をかぶり，素足にゲタをつっかけて１００メートルほど離れた山肌に造った防空壕(ごう)へと走った。壕(ごう)にたどり着くと同時に「ドドーン，ドドーン」と腹にひびく爆風に震え上がったのを覚えている。

大人の会話から「水島工業地帯（当時軍用機を製造していた三菱(びし)重工業水島航空機製作所＝現三菱(びし)自動車水島製作所）」が爆撃されているということが理解できた。私は湿った薄暗い壕(ごう)の中ほどから，恐る恐る入口へ出て空を見上げてみると，水島方面の空には無数のＢ２９爆撃機（１００機以上と聞いている）が，整然と編隊を組んで爆弾の雨を降らせながら飛んでいる。そこには，日本の飛行機は１機も現れず，飛んでいるのはＢ２９爆撃機と護衛のグラマン(※2)戦闘機のみである。グラマン戦闘機にいたっては，のどかな田舎の集落まで飛んで来て，しかも超低空飛行で私たちの頭上を飛び回り，手を振っているように見えた。それは私にとっては，とても恐ろしい，そして悔しく悲しい光景であった。今，思い出してもゾッとする。我が頭上は敵機のみとは。

一方，高射砲陣地からの砲弾は音だけはしているが，敵機には全然届かず，遥(はる)か下方でパンパンとはじけて落下して来ている。その様子を見て，目の良くない年配のおばあさんは，高射砲の弾が敵機に命中し敵機がバラバラになって落ちて来ていると思い「勝った，勝った」と手を叩(たた)いて喜んでいる。その姿が自分にはとても悲しく涙が止まらなかったのを覚えている（なぜならば落ちて来ているのはＢ２９爆撃機からの爆弾だか

ら）。本当に悔しく悲しい一日であった。

“鬼畜米英”“撃ちてし止まん”“欲しがりません勝つまでは”等々の精神論と竹(※3)やりでは戦争にならない。この日も水島工業地帯では，学(※4)徒動員を含めた多勢の方々が亡くなられたと聞いている。

この空爆で亡くなられた方々の御冥福を祈って筆を置く。

【学徒動員】

※1 防空頭巾…空襲の際に落下物から頭や首筋を守るためにかぶった綿入れの頭巾。
※2 グラマン…アメリカの航空機メーカー。
※3 竹やり…竹を適当な長さに切った上で，先端部を斜めに切断した，あるいは その円周の一部だけを尖らせたもので，更に火で炙るなどして硬化処理を施した簡易の 武器。
※4 学徒動員…1938 年頃から国内の労働力不足を補うために，学生・生徒を軍需工場などで強制的に労働させたこと。

# 昭和２０年・水島大空襲と艦載機の空襲

大　橋　一　夫　さん

今年・戦後７０年の大きな節目。私自身も７９歳を迎え，当時の記憶を辿(たど)れば小学３年・９歳の私の体験は現実と思えぬ強烈なものでした。

「何故，戦争になったのか」

幾度も語り合う機会を持ちましたが，先輩・友人の中に鬼籍(きせき)(※1)に入られる方もあり，寂しい限りです。

　これを機に歴史認識を深め，自分史の一部として語り継いでいきたいと思います。

（１）　水島大空襲と北畝着弾

　昭和２０年，戦況は益々厳しく３月の東京空襲に始まり，標的が地方都市に及ぶようになりました。

　ついに６月２２日，水島大空襲を体験。当日は農繁(※2)期で学校は休み，三菱(びし)も定休日。当時，北畝の畑ではサトウ木と麦の作付けが多く，この日は上天気。早朝から隣近所の協同で刈入れ作業，子供の私も手伝っていました。

　作業が始まって間も無く，警戒と空襲のサイレンが続いて鳴り響き，最初は“またか”という軽い気持ちでした。

　ところが爆音の凄さに今回はどうも違うと両親の話し合う声。ひと先ず農作業は一旦中止となりました。

　私の家でも，生家裏の防空壕(ごう)に老いた祖母を背負い，家族９人が避難した。外ではゴーゴーという飛行機の爆音が続き，加えて腹に響く重々しい音。父が，「どうも三菱(びし)工場方面に爆弾が落ちて大変になっているらしい。」と報告してくれた。好奇心旺盛な三兄と私は両親の制止を振り切り，銀杏(いちょう)の大木に１０m程登った。南西約２ｋm程先の三菱(びし)工場群が炎と黒煙に包まれ，薄汚れた上空には団子状の黒煙が点々と浮いて，今まで

見たこともない光景が広がっていました。広江上空から爆音が続き，目を転じると，１０機程の編隊が三菱(びし)上空に進むと機体の下から爆弾が落ちながらヒュー，ゴー，ドドーンと空気を裂く音がして着弾する。各機が同じ行動をするので舞い上がる火柱と広がる黒煙で凄まじい様が続いていく。

これを受けて，地上の各所から高射砲が反撃するが，残念ながら高所の爆撃機まで届かず，編隊の下で破裂して黒煙が散る。後日，米軍の記録には，総数１１０機程が約１時間の爆撃とあり，水島大空襲でありました。爆撃終了でほっと一息つくと，今度は最前と異なる南西方面から低空で爆撃機が２機，私達の木に向かって来るではないか。一瞬，私達が標的と錯覚，木から下りて生家まで逃げ帰った時，地響きと爆風の衝撃で２人共，数メートル，ハネ飛ばされた。何が起きたのかわからず，見れば生家の玄関障子が押し倒され，桟がバラバラに折れていました。

のちほど，５００m程先の畑に落ちた３発の爆弾のためだとわかり，もう少し近ければと思い，ゾッとする体験でした。

幸いに死者は無く, 近辺の家屋被害のみでしたが爆弾片が数年, 田畑から掘り出され, 記念に保管している方もおられます。後にこれが呉工場地帯を爆撃のあと２機が飛来して中畝高射砲陣地を狙ったのが外れ，着弾したものとわかりました。

終戦後, 水島港近辺は子供の遊び場ともなり, 友達と度々, 空襲跡を見に行きました。

鉄骨が折れ曲がり, むき出しになった建物, ガラス片が散乱し無数に空いた大きな穴, 滑走路には飛行機の残骸，広い工場の廃墟(はいきょ)に言葉を失う。港東岸の田畑にも無数の爆弾跡，岸壁には不発弾が突き刺さって放置されていました。

（２）　艦載機の空襲

戦時体験で一番恐怖に感じたのは, 昭和２０年７月の四国沖空母(※3)から発進した何機もの艦載機による空襲でした。記録によれば２２日，２４日の２回，三菱(びし)工場関連施設と社宅，農家を襲撃した様子を今でも鮮明に思い出します。両日，学校は夏休み中，空襲警報で壕(ごう)に避難した。時折り，顔を出しては状況を見て戦闘機の空襲であることが判り

ました。特徴あるグラマン戦闘機が縦列で編隊(※4)を組み，飛行士の顔が見える程の超低空で南から機銃(※5)掃射をしながら北方面に飛び去っていきます。反転して南に戻りながら何度もこれを繰り返す。壕(ごう)に入っていても弾がブスブス地面に刺さる音が伝わり，まるで間近で襲われている様で薄気味悪く怖い。敵機を迎え撃つ飛行機はこちらには無く，地上から高射砲で反撃するが，スピードに照準が合わないのか後々で破裂して当たらない。子供心にも誠に悔しく，はがゆい思いをしました。

後日，戦闘機に追われて逃げた経験を語る人，雨漏りで屋根の被弾が判ったと語る人，機銃掃射で負傷した人，臨海水島駅(※6)では爆弾で屋根がめくり上がっている風景もありました。

年を重ねて今思えば，戦争とは，非情で，戦闘員である無しを問わず，銃口を向けられ命を遺り取りすることもあったと痛感します。

戦後７０年も経ち，環境も世代も変わり，戦時の惨事を思い出させるものは今は無いが，銃後の戦争立会人の１人として，歴史認識を新たに持ち，語り継いでいきます。

---

※1 鬼籍に入る…亡くなること。
※2 農繁期…田植えや収穫などで，特に農作業の忙しい時期 。
※3 空母…飛行甲板を持ち，航空機運用能力を持つ艦船のことを言う。
※4 編隊…2 機以上の航空機が一定の間隔，隊形を保持していること。また、その隊形。
※5 機銃掃射…機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること。
※6 臨海水島駅…水島臨海鉄道の水島駅。

# 「少年の記憶」太平洋戦争と水島の戦場

三　宅　啓　介　さん

私は昭和９年２月生まれ，８１歳になる。昭和１５年連島西浦尋常小学校へ入学した。時に紀(※1)元二千六百年，国の一大行事として各地日の丸を掲げ提(※2)灯行列で盛り上がっていた。

翌１６年，２年生に進級。小学校は国民学校へ改名。日中戦争（当時は支那事変）中とはいえ，対米英戦争への足音は子ども心に感ずるものはあった。二学期の終わりに近く，１２月８日を迎える。朝近所の人々が集まり「万歳」「万歳」と大歓声を上げ，ラジオは「軍(※3)艦マーチ」と共に大(※4)本営発表が鳴り響いていた。帝国海軍真(※5)珠湾攻撃の報である。

年は変り翌１７年，シンガポール陥落など日本軍の連勝連勝の報に一億国民老若男女胸を躍らせてラジオのニュースに聞き入った。戦後知ったものの，同年ミッドウェー海戦においては日本は大敗北を喫したにもかかわらず，大本営は勝利のみを報道し国民を鼓舞させていたのである。

国民学校においては毎月８日を大(※6)詔奉戴日とし，全生徒は主神様に参拝，校長は開戦の勅(※7)語を朗読，全員戦勝を祈願した。

時は少し前に戻り，亀島山の南の海を埋め立て三菱重工業が飛行機工場の建設を始めた。また，北側の田畑では工場で働く社員住宅の整地も始まり，住宅，商店と続々と出来上がっていった。

水島という地名は約４キロ先に浮かぶ小島，上水島と下水島の名前から命名されたものである。工場も完成し１９年２月１１日の紀元節（建国記念日），海軍一式陸上攻撃機が完成。その初飛行の式典に小学生は全員日の丸の小旗を持って参加した。初めて見る双(※8)発の４枚プロペラ，濃い緑色に塗装された機体，その勇姿を見て血(※9)湧き肉躍った思いを覚えている。長い式典が終り初飛行は成功。上空を旋回後，東の空へ翼を左右に振

って消えて行った。名古屋で武装し戦地へ行くとの説明に目を輝かせて聞いたものである。三菱(びし)の飛行機工場完成間近，連島の箆取山に海軍一個中隊が赴任。兵舎を建て高射砲陣地を築き５門の高射砲が南の空を向き水島の防衛にあたった。前に述べたラジオの「軍艦マーチ」はほとんど聞かれなくなり，１９年秋には神風(※10)特別攻撃隊，２０年にかけてはサイパン等の玉砕(※11)で，それは「海ゆかば(※12)」に変っていった。それまでＢ２９の空襲は成都(※13)（中国）より飛来し，主に北九州工業地帯を目標にしていたが，サイパン，テニアン島を基地としてＢ２９の日本本土爆撃が始まる。3月の東京大空襲，そして大阪，神戸と主要都市は次々と焼夷(※14)弾の雨にさらされていった。ある晴れた日，１機のＢ２９が超高空より銀色に輝きながら飛行機雲を引き，ゆっくりと水島上空を１周した。それに前後して，3月に何の警報も無く高空よりＢ２９が数発の爆弾を三菱(びし)の工場に投下した。５年生末期の授業中でもあり，窓から見た爆発音と噴煙は物凄く，これが水島が戦場になる前触れでもあった。6月２２日は朝８時過ぎ突然の空襲警報。空を見上げれば空一面と言っても過言ではないＢ２９の編隊。今まで見たことも無い低空，銀色に見えた機体も黒く見え，それは数えきれない大編隊であった。同時に箆取山の高射砲も火をふいた。上空での砲弾の炸裂音，破片が屋根の上に落ちてくる。同時に夕立にも似た爆弾の落下音，続いての爆発音，地震の様な振動と爆風，防空壕に入っているものの初めて知る恐怖，時間で言えば１時間足らずで静寂が訪れる。家族の制止を振り切り裏山へ駆け上がる。亀島山全体が黒煙に包まれ，後ろの三菱(びし)の工場は火の海，立ち昇る黒煙は何千ｍも高く，空一面を覆っていた。

【第１号機の進空式】

しばらくして雨が降ってきた。あの黒煙が雨を招いたものと思う。後日，岡山市への空襲。夜間のため焼夷弾が空中で炸裂，小さな火の玉の落下して行く様子は連島でも見

ることができた。次にやってきたのは，グラマンの来襲である。地上で動く物に狙いを定め機銃を打ちまくる様子は，正に地獄であった。１機のグラマンに対空砲火(※15)が命中。白い煙を引いて南の空に消えて行った時の歓びは大変なものであった。日々グラマンの来襲に怯えながら８月６日には広島が１発の爆弾で消滅したとの報は特殊爆弾と報じられ，強い光線を出すため白い衣服をとの指示があり，９日には長崎と続き，８月１５日を迎える。「本日正午，天皇陛下が重大な放送をされる。」との報があり，正午ラジオの前に立ったものの，雑音が激しく聞き取る事はできず，その日の夕刻になり日本の敗戦を知った。日本が敗けた悔しさは不思議と無く，一番に心の中を走ったことは「これで空襲が無くなる」そのことのみであった。水島の戦場はここで終わりをつげる。

６年生も２学期が始まる。あの軍国主義(※16)教育はかけらも無く，教科書のページは次々と黒く塗り潰し，その作業のみに追われていった。あの軍国主義から民主主義への変わり身の早さは正に驚きで，日本人の体質か今もって不思議な思いがするのは，私だけだろうか。

最後に，水島の戦場も含め，あの戦禍(※17)に倒れた三百余万の御霊(※18)に心から哀悼の意を表します。

---

※1 紀元二千六百年…1940 年が神武天皇の即位から 2600 年目に当たるとされたことから，式典などの記念行事が行われた。

※2 提灯行列…祝意を表すため，夜間，大勢の人が提灯をもち列を組んでねり歩くこと。

※3 軍艦マーチ…鳥山啓作詞，瀬戸口藤吉作曲の軍歌。

※4 大本営発表…太平洋戦争（大東亜戦争）において，日本軍の最高統帥機関であった大本営が行った，戦況などに関する公式発表のこと。

※5 真珠湾攻撃…ハワイ・オアフ島の真珠湾（パール・ハーバー）にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して日本海軍が行った攻撃。

※6 大詔奉戴日…太平洋戦争完遂のための大政翼賛の一環として，昭和１７年から終戦まで実施された国民運動。太平洋戦争開戦の日にちなんで，毎月８日に設定された。

※7 勅語…天皇のことば。

※8 双発…エンジンが２個あること。

※9 血湧き肉躍る…勇ましくて興奮させられる。

※10 神風特別攻撃隊…太平洋戦争末期，追いつめられた大日本帝国海軍が編成した特別攻撃隊。機体に爆弾を固定した航空機による敵艦船への体当たり攻撃を行った。

※11 玉砕…玉のように砕けること。太平洋戦争における日本軍部隊の全滅を表現する言葉として大本営発表などで用いられた。
※12 海ゆかば…万葉の歌人，大伴家持の長歌の一節に信時潔が曲を付けた軍歌。
※13 成都…中国四川省の省都。戦時中は B29 による日本本土空襲の基地となった。
※14 焼夷弾…火災を引き起こすために作られた爆弾。
※15 対空砲火…航空機に対して行われる，火砲による攻撃。
※16 軍国主義…戦争を外交の主たる手段と考え，軍事力を最優先する考え方ないしイデオロギー。
※17 戦禍…戦争による被害・災難。
※18 御霊…魂（たましい）の尊敬語。

# 「水島空襲の真実ーガラガラ音」

吉　田　敬　治　さん

今から７０年前，太平洋戦争終結の年の水島空襲の惨状(※1)について，その真実を語りたいと思います。私は当時，三菱(びし)重工業水島航空機製作所に勤務していました。ここは，毎日，一万数千人の人が働いている，一式(※2)陸上攻撃機を製造する大きな工場でした。攻撃機の胴体を製造する第二組立工場では二千人以上が働き，そこが私の職場でした。

水島空襲の前日，昭和２０年６月２１日夕刻，連島町箆取(へらとり)神社の近くにあった旅館で，工場長主催の懇親会が開かれ，役職者や技術者，約３０人が参加して，厳しい戦争中とはいえ，楽しいひと時を過ごしました。宿直のため，その晩は同僚のＫ君と２人で宿直室に就寝しました。

翌朝午前７時頃に起床して，自分一人で，工場内外を巡回しました。内外ともに静寂そのものでした。雲が少し浮かんでいましたが，晴天でした。しかし，事態は急変しました。

午前８時２５分頃，宿直室に帰ると，Ｋ君から「ラジオ放送で岡山県南部に空襲警報が発令されている」と教えられました。直後，第二報で「敵機は播磨灘(はりまなだ)上空を西進中」との放送を聞き，慌てて，建物の北側の屋外に出て上空を見上げると，敵機はまだ見えず, 青空の中を綿の様な白い雲が, 亀島山上空から水島灘(なだ)に向かって浮流していました。足は自然に北の方に向い，約１０分後，気がつくと北の端，海軍部隊兵舎の東側付近の防空壕が点在する付近に到着していました。

東の空を見上げながら, 土の中に造られた防空壕(ごう)に避難しました。深さは１．６m位, 幅は１m位, 長さは３m位でした。この様な防空壕(ごう)が土の中に五か所造られていました。鉄骨ではなく，丸太の木組でした。上空は依然として，白い雲の流れる青空でした。

「午前８時５０分頃, 米軍機編隊第一陣がかすかな爆音を響かせながら水島駅東方上空に出現する」。芥子粒(けしつぶ)(※3)位の点々に見えました。高度は８，５００mか９，０００m位

だったと思います。直後ガラガラガラと金属音が響き渡り３０秒から４０秒位続きました。後はザーザーザーと，その音は，番傘(※4)に夕立ちの大雨が降りそそぐ音のようでした。「ザーザー音に代わって，耳が圧迫される」。「その直後ドドーン，ドドーン，ドドーンと万雷(※5)の響きに似た爆発音が響き渡る」。防空壕(ごう)の底で，今までに経験した事の無い，身震いする恐ろしさを体験しました。

Ｂ２９爆撃機１機が５００kg爆弾を１０個運んで来たとしても，１１機編隊で１１０個の爆弾を投下した事になります。爆弾を受けた時の強い衝撃は，あたかも雷が一度に１００個以上落ちる衝撃に匹敵するように思いました。それぐらい，激しい空襲でした。

暫(しばら)くして防空壕から出て，工場の方を眺めると製作所東北部の材料置場と機械工場方面から黒煙が立ち上っていて，南西の方向に向かって流れていました。

約１０分経過した午前９時頃第二波の敵編隊１１機が現れました。次第に機械工場，第一・第二・第三板金(※6)工場と，西南へと爆撃目標が移動していきました。第六波攻撃で，私の職場・第二組立工場（胴体工場）は，無残にも爆撃されてしまいました。その後，七波攻撃から十波攻撃により，南の第一組立工場（総組立工場），工場外に置かれた胴体部分，完成した飛行機等，数十機が破壊されました。

【一式陸上攻撃機の残骸（中央は銃座）】

Ｂ２９爆撃機は，種松山上空から水島駅上空に向かって一直線に飛来して，水島駅東側上空で爆弾を投下しました。空を見上げていると，爆弾を投下した１１機編隊の爆撃機は機体が軽くなって，上空に浮き上がっていきました。そのまま編隊を変化させる事なく玉島方向に飛行を続けて行きました。

午前１０時頃，爆撃が終わったので１０時５０分頃から，Ｋ君と一緒に第二組立工場

に入って様子を見て回りました。工場東北部の屋根が広い範囲で破れ，鉄骨が曲がっているのが目に入ってきました。黒煙が立ち昇っている場所があるので近づいて見ると，攻撃機製造の図面である青写真が燃えており，火の付いた青写真，また灰になった青写真が，破壊された屋根の空間から空に舞い上がっていました。急いで箒(ほうき)で火を叩(たた)いて消しました。火が消えたので，北東部の食堂に通じる扉を開けて外へ出ようとした時，間近でドカーンと轟音(※7)(ごうおん)がしたので恐る恐る扉を開けてみると，工場と食堂の中間に直径い１２～１３m，深さ１０m位の大穴ができていました。編隊を離れて遅れた１機が爆弾を投下したと想像しています。

以上が７０年前の６月２２日，三菱(びし)重工業水島航空機製作所空襲の記憶です。２２日の空襲に関して，製作所内での死傷者は皆無(※8)と聞いて安堵(※9)(あんど)した記憶は，今でも鮮明に覚えています。

空襲で，大変に恐ろしい色々の音を聞きました。ガラガラ音は爆弾の先端部に装着された金属製の羽根車が回転して起爆(※10)止めの安全装置を引抜く音です。未だに忘れることができない音になっています。

戦争は恐ろしい行為です。戦後７０年が経ち，戦争体験をした人たちが少なくなってきました。戦争の悲惨さを後世に伝えることは重要です。９０歳になった今，語り部として戦争の話を若い人たちに伝えていきたいと秘かに思っています。平和な日本，平和な世界であることを祈りながら。

---

※1 惨状…思わず目をそむけたくなるような，むごたらしいありさま。いたましいありさま。
※2 一式陸上攻撃機…第 2 次世界大戦中の日本海軍の主力中型爆撃機。一式陸攻と略称する。
※3 芥子粒…ケシの種子。きわめて小さいもののたとえ。
※4 番傘…竹骨に紙を張り油をひいた，粗末な雨傘
※5 万雷…多くの雷。転じて大きな音の形容
※6 板金…金属の板に力を加えて変形させ，決められた形状・大きさの製品を作ること。
※7 轟音…大きく鳴り響く音。
※8 皆無…少しもないこと。何もないこと。
※9 安堵…気がかりなことが除かれ，安心すること。
※10 起爆…火薬に爆発反応を起こさせること。

# 三菱(びし)重工業水島航空機製作所　爆撃のことほか

金　光　秀　直　さん

私は今，８３歳と高齢になり，戦後７０年も経た今でもあの日のことははっきりと脳裏(※1)に焼き付いて離れない。

【勤労奉仕作業】

小学校６年から行く旧制の県立倉敷工業学校１年の初夏，１９４５年６月２２日，戦争はまさに日々激しさを増し，学校から勤労奉仕で小麦刈りに霞(かすみ)橋東岸下の岡崎神社まで自転車の人，数十人と行く。集合して点呼(※2)を取り数人ずつ何組かに分かれて畑に１００メートル位入りかけると，警戒警報のサイレンが「ウーン，ウーン」と間をあけて鳴り出した。するとその時，現在，鷲羽山(わしゅうざん)道路がついている所のゴルフ場のある西の山の辺りより高射砲の音がしかけ，Ｂ２９の飛行機が見えだしたから，小麦の間に身を沈め耳や目を手でふさぎ，平素から教わっていたように腕立て伏せをし，肘をついておると「ドカドカドカン」と腹をえぐられるような，私の体めがけて爆弾が落ちてきた様な音がして，ふさいでいた手が外れ，なおも「パン，パン」と音が止まない。首をあげると，船穂の宝満寺の辺りより機関砲らしきものを打つ音がし，また玉島戸島神社辺りからもＢ２９を目がけて打っておった。やっと音がおさまったと思ってほっとしていると，まわりに人は１人もいない。点呼をとった所の土手へ帰ると，友が一人いて二人で土手へ寝転んでいたら，またＢ２９が高さ７，０００メートル程の上空を１０機位が３機編隊でやってきて，前回と同じ重工業の上だけに落とした。落とした瞬間は横向きで爆弾はバラバラ見えてい

たが，縦に向くと「ヒューヒュー，ゴウーゴウー」と音がして「ドカン，ドカン，ドーン」ともの凄い破裂音がした。亀島山の上と今の倉敷芸術科学大学の東の山の辺りでも高射砲があり撃つ。日本の高射砲の性能がアメリカには十分わかっていたのであろう。撃った弾は６，０００メートル位の高さで破裂するので，撃っても撃っても届かないのだと後でわかった。１０回前後来たうちで１回，高梁(はし)川の河口のあたりを水島から玉島の方へ向かっている船（漁船の４～５倍）へ，機密な物を運んでいると思ったのか１回だけ爆弾を落とし，船は影も形もなくなっていた。空襲が済んでグラマン戦闘機が写真を撮ったのかぐるぐる回って帰った。弾の破片がバラバラ落ちているのもわからず，土手に終わりまでいた。

後日，友と船で沖より上がり爆撃地三菱(びし)辺りまで行ったが，会社の建物は鉄骨が無残にも焼け残っていたのを見た。当時の現場をまざまざと見て，少年の心の一隅に戦争の恐ろしさを，生涯忘れえぬものとして残し続けてきた。

そして，その夏ついに終戦となった。

---

※1 脳裏…頭の中。心の中。
※2 点呼…人員がそろっているかどうか調べること。